

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：18K18246
研究課題名（和文）英統治下パレスチナでの宗教観の変容 汎イスラーム主義言説とフォークロアの比較
研究課題名（英文）The Transformation of the Religious Consciousness Under the British Mandate in Palestine: Comparison between the Pan-Islamist Discourses and the Popular Folklore.
研究代表者
金城 美幸（Kinjo, Miyuki）
立命館大学・衣笠総合研究機構・プロジェクト研究員
研究者番号：80632215
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英国パレスチナ委任統治下パレスチナでの民族指導者の汎イスラーム的言説と、農村における宗教観の比較研究を行った。まず、パレスチナ民族指導者は、ユダヤ人国家建国を支持する英国の植民地下で、宗教的権利のみしか認められなかったために、汎イスラーム的言説を抵抗戦略として利用した点を明らかにした。他方、農村ではシオニストの入植の結果として土地喪失を経験しながらも、農民たちはイスラーム的慣習の下で、土着のユダヤ教徒やアラブ地域出身のユダヤ教徒との共生的な宗教実践が維持された点が明らかになった。この比較研究により、英国委任統治によるイスラームへの介入によって宗教対立が顕在化した過程を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、英国委任統治下パレスチナの民族指導者の汎イスラーム的言説と、農村での宗教観を比較し、当時のパレスチナ民族運動内の言説のバリエーションと内部での緊張関係を明らかにした。

第二に、テロを扇動する言説の典型とされることの多いパレスチナ民族指導者の汎イスラーム的言説が、英国の植民地政策に対応した戦略だったことを示し、英国の植民地政策がパレスチナの宗教対立を強化したことを明らかにした。

第三に、一部のオーラルヒストリー研究しかなかった農村の状況について、難民が出版してきた故郷の村落史を複数収集して分析し、イスラエル建国前まで存在した宗教実践の中での他者との共存の在り方に光を当てた。

研究成果の概要（英文）： This research conducted a comparative study on pan-Islamic discourse of Palestinian national leaders and popular religious views in rural areas during the British Mandate period in Palestine. First, this research revealed that the Palestinian national leaders used a pan-Islamic discourse as a resistance strategy, as they were only allowed religious rights under the British colonial rule that primarily supported the establishment of a Jewish state. Second, it clarified that while rural communities experienced land loss caused by the Zionists' colonization, they maintained Islamic religious practices that were congruent with the life of indigenous Jews and Jews from the Arab region. This comparative study showed the process by which the religious conflict emerged due to the intervention in Islam by the British Mandate.

研究分野：パレスチナ地域研究

キーワード：ナクバ オーラルヒストリー 植民地主義 難民 イスラーム

1. 研究開始当初の背景

メディアなど一般の言説では、パレスチナ問題は「民族対立」ないしは「宗教対立」として語られることが多い。もともとパレスチナ/イスラエル研究においては、パレスチナ問題は両社会でのナショナリズムの対立として説明されてきた。パレスチナ研究では西洋帝国主義に対抗するアラブ民族主義が、イスラエル研究ではパレスチナでのユダヤ人国家建設を目指すシオニズムが、民族解放の道だと理解されて来たのである。

これに対し、1970年代以降、パレスチナ問題の宗教対立としての側面が注目され始めた。理由は、イスラエルが第三次中東戦争(1967年)でパレスチナ全土を占領した結果、一部のイスラエル人の中でメシア的救済史観に基づく入植活動が活発化し、宗教的シオニズムと呼ばれる潮流に関心が高まったためだった。また中東レベルでも、イラン・イスラーム革命(1979年)以降は、アラブ民族主義からイスラームへと研究の重点が移り、パレスチナでもイスラエルに対する民衆蜂起であるインティファダ(1987年)期に誕生したイスラーム主義組織ハマースに注目が集まった。

だが、これまでパレスチナ問題を宗教の観点から論じる精緻な研究は限定的だった。宗教は西洋的な近代化に対抗する制度・思想・生活実践と理解される傾向が強く、西洋的近代から独立した現地固有の論理として静態的に捉えられてきたためである。結果、宿命論的な宗教対立として紛争をとらえる硬直化した理解が続いてきた。

これらの理解が見過ぎてきた点は、パレスチナでは英国の委任統治期(1918~48)に先住者パレスチナ人の管理のためにイスラーム制度が利用・改変される中でパレスチナ問題が形成されたことだった。英国がパレスチナでイスラーム制度を利用した主な理由は、委任統治を行う上で英国が土台としたバルフォア宣言(1917)と関わっている。この宣言は、パレスチナを「ユダヤ人の民族的郷土」と規定してユダヤ人の民族的権利を認め、一方、多数派である先住者パレスチナ人については「市民的・宗教的権利」の保護しか認めないものだった。つまり、ユダヤ人移民には政治機関の創設を通じた民族郷土設立プロセスへの参加が保障された一方、先住者が民族的主体であることは否定されたのである。そして、「市民的・宗教的権利」の保護を名目に、新たなイスラーム制度をパレスチナで創出し、その下で寄進不動産(ワクフ)の管理やイスラーム法廷の運営という「自治」を与え、宗教コミュニティを単位とした先住者の管理を行った。

この英国の政策下でパレスチナ人の抵抗運動を主導したハーッジ・アミン・アル=フサイニーは、英国が創ったイスラーム制度下で宗教行政の枠組みの中で当局と交渉し、その過程で汎イスラーム的ネットワークの構築を通じた植民地支配への抵抗論理を立ち上げたのだった。つまり、パレスチナ問題における宗教対立は、オスマン帝国時代からの宗教的仕組みが英国の植民地統治下によって再編成されることが大きく影響していると言える。

その後アル=フサイニーは、英国と対立して亡命し、結果的にナチス・ドイツに協力した。この軌跡ゆえに彼は多くの論争を呼んできた。特にイスラエルや欧米の言説では、彼がイスラーム行政における権力を独占したとし、さらに彼が国境を越えたムスリムの団結(汎イスラーム主義)を唱えたことから、彼を「イスラーム・テロリズム」の元型だとするステレオタイプが発信されてきた。だが、こうした議論では、アル=フサイニーが英国委任統治期に民族運動の指導者となった背景に英国との強い協力関係があった点を見過している。

とはいえ、委任統治のための手段として英国が設計したイスラーム制度に対抗するために生まれた汎イスラーム的言説と、当時のパレスチナ人民衆の宗教観や宗教実践との間には大きな隔たりがあった。パレスチナ難民の言説、特にフォークロアには、オスマン帝国時代のパレスチナ人民衆の間に存在した三宗教間の共生の記憶が多分に含まれている。これらのフォークロアは、口承の語りに基づいているために文書資料中心的な歴史研究からは注目されず、またパレスチナ難民が離散状況にあるために収集されにくいものだが、今日のパレスチナ難民が保持する離散以前の社会についての記憶が書き込まれている重要な資料となっている。これらの資料を使えば、植民地統治の技法として制度化されたイスラームおよびそこから生まれた汎イスラーム的言説との距離を明らかにすることが可能となる。

2. 研究の目的

従来のパレスチナ/イスラエル研究では、世俗的ナショナリズムの対立としての問題設定が優勢であった。この研究史の中では、宗教はナショナリズムを補助する道具だったと見る道具主義的な見方が維持されてきた。これに対し本研究では、英国統治政府は先住者に関してはナショナリズムを否定したまま住民を統治する際に準拠する枠組みとして、イスラームを利用したという認識から出発する。それが結果的に聖地エルサレムを拠点とする汎イスラーム主義的言説を助長する事態の背景であった。本研究では、西洋の植民地主義的統治と汎イスラーム主義的言説の関連付けながら、それが従来パレスチナに存在した多宗教的社会構造に及ぼした影響を考察することを目的とする。これにより、民族・宗教・宗派などのカテゴリーが操作されながら固定化され、暴力を伴う対立へと発展している現状から、いかに脱却するのかという構想作りへの一助を提供することができると考えた。

上記の点から、本研究では以下の3点を目的に掲げた。

- (1)英国統治期、パレスチナ先住者の管理の手段として再設計されたイスラーム制度の下で生まれた新興エリートたちの汎イスラーム主義言説を整理する。
- (2)パレスチナ難民が故郷の村落について語るフォークロアを分析し、ムスリム農民や民衆がどのような宗教観を抱いていたのかを分析する。
- (3) (1)・(2)の言説の間の隔たりを分析し、汎イスラーム主義言説が民衆の宗教観に与えた影響を考察する。

これらの点を明らかにすることで、本研究は、イスラーム対西洋という二項対立的視点を再検討するとともに、今日の中東／イスラーム世界における政治制度の混乱要因の一つに、西洋植民地主義の介入があった点を提起することを目指した。これは西洋中心主義的な世界史認識を捉え直す視点も含んでいる。

さらに本研究では、西洋によるイスラームへの介入の問題性を、パレスチナ難民のフォークロアから照らし出すことにも取り組んだ。申請者が行ってきた難民のフォークロア研究では、当時のパレスチナ農村には多宗教信徒間の共存があり、それが様々な日常の場面で経験されてきた点が明らかとなっている。しかし、これらパレスチナ農村の姿は何重にも周縁化されてきた。背景には、西洋中心的な学術研究が抱えるオリエンタリズム的認識の問題、難民＝サバルタン化した民衆の声の表象をめぐる問題、そして破壊された村落の姿を伝える資料の喪失・離散という問題がある。これに対し申請者は、現地調査を重ねて1980年代に試みられた破壊された村落についてのフォークロア記録を収集し、そこで示された村落像に接近すべく取り組んできた。この蓄積を利点として本研究を進めることで、イスラーム対西洋という硬直した視点を揺さぶる、かつてのパレスチナ村落に存在したイスラーム観の提示を目指した。

3．研究の方法

本研究は下記の3つの方法論を用いた。第一に、英国委任統治下で生まれたパレスチナ人新興エリートが採用した汎イスラーム主義言説の検討を行った。近年の研究を参照して英国委任統治下で再設計されたイスラーム制度について整理し、この新たな環境の中に対峙する新興エリートたちが発信した言説を、出版文献を使って調査し、汎イスラーム主義的言説に凝縮していく過程を分析した。

第二に、イスラエル建国とともに故郷を追われた難民が、離散下で出版してきたフォークロアの分析を行った。現地調査を通してパレスチナのヨルダン川西岸地区ビルゼイト大学が1980年代に出版した『破壊されたパレスチナ村落』シリーズ全22冊を収集し、そこに記されたムスリム民衆の宗教実践を分析した。この過程で、聖地利用のあり方、年間行事、伝承、都市のイスラーム制度との関係の考察から、民衆の宗教実践のなかにあった多宗教信徒との関係を明らかにした。また、民衆が新興エリートらの汎イスラーム主義的言説をどう受容し、あるいはしなかったのかを、地域・社会階層の差異を念頭に入れ様々な事例を抽出して考察した。

第三に、上記の二つの研究の比較研究を行い、新興エリートの汎イスラーム主義的言説と農村民衆のイスラーム実践とを比較検討し、同じイスラームに基づきながらも、両者の社会像の差異とは何だったかを明らかにした。

4．研究成果

本研究は当初3年間での実施を予定していたが、コロナ禍による行動規制や海外渡航制限のため、2年間実施期間を延長して行った。

本研究の成果を「3．研究方法」で述べた3点に即して述べると、第一の点については、ハーヅジ・アミン・アル＝フサイニーの出版文献の収集・分析から、アル＝フサイニーが英国に対して示していた両義的な対応を考察した。この過程から、アル＝フサイニーは、自身をパレスチナ人の代表に位置づけた英国との関係を維持しつつも、英国から与えられた宗教行政トップの立場を利用する形で、聖地エルサレムの危機を訴えかけることによってパレスチナ内外に汎イスラーム主義のネットワークを形成し、帝国主義に対する汎イスラーム的抵抗言説の構築に努めたこと、すなわち、アル＝フサイニーにとって汎イスラーム的言説は英国との対抗・交渉関係のなかで構築されたものであることが明らかになった。

第二の点については、1920年代のイギリス委任統治下パレスチナで登場した汎イスラーム的言説の中心となったエルサレム地域に焦点を当て、都市エルサレムで急速に政治化していくエリートの言説の一方で、農村部で維持された伝統的かつローカルなイスラームをめぐる言説の相互的な影響と差異について考察した。ここで焦点を当てたのは、エルサレムの中心部から北西5キロメートルに位置し、イスラエル建国とともに破壊されたりフター村の村落史である。同村の出身者は離散先でもネットワークを維持しており、本研究では現地調査を通して同郷者コミュニティ内で発刊されてきた6冊の村落史を収集し、それらの分析を行った。

これらの村落史から明らかになるのは、リフター村はシオニストの入植活動の開始以前から、アラブ世界出身でアラビア語を話すユダヤ教徒が居住しており、宗教的な祝日とともに訪問しあって祝うなど、日常のなかでのユダヤ教徒とムスリムの交流があったことである。これらの宗教儀礼や破壊された故郷の地名は、イスラーム王朝時代のユダヤ教徒とムスリムの共生の記憶を物語るものとして記憶されている点が明らかになった。

第三の点については、以下の点が明らかになった。エルサレムの中心に近いリフター村は、アル＝フサイニーを中心とするエリートたちの政治勢力の影響を様々に受け、村民は汎イスラーム的言説を旗印に数々の抗議活動や反乱に参加した事実があるものの、村落史ではリフター村の特徴としてはむしろ農村として都市エルサレムやエリートからは自立した形で維持されてきた共存の歴史が強調されていることである。例えば、英国委任統治期は、英国から割り当てられる権力の座を巡って、アル＝フサイニーを中心とする「アル＝フサイニー派」と、彼らと敵対するパレスチナ内の名望家アル＝ナシャーシービー家を中心とする「アル＝ナシャーシービー派」の対立が深刻であった。この対立はリフター村にも影響し、エルサレム市長選挙などを通して村内で緊張関係が深まる事態もしばしばあった。しかし、村落史ではこれらの事態は「一時的」な対立、あるいは「一部の若者」の対立として語られる傾向にあり、村を分断する危機的状況とは捉えられていなかった。むしろ村落史では、リフター村およびパレスチナの農村の特徴としての異教徒を含めた調和的・共存的な暮らしが強調されることが一般的であった。

以上をまとめると、本研究を通して、都市エルサレムでは英国委任統治下で民族自決権は否定されながらも宗教行政の領域で活動を許されたアル＝フサイニーを中心に、英当局と対抗・交渉をしながら汎イスラーム的言説が構築されていった点が明らかになった。隣接するリフター村では、政治的な画期となる抗議活動や反乱において、アル＝フサイニーが発信する汎イスラーム的言説の下に組織化されたが、その一方では農村で培われてきた異教徒との共存の伝統の中で、個々のユダヤ教徒／ユダヤ人入植者と渡り合う農民たちの姿を確認することができた。本研究では英国委任統治下で再編された民族・宗教のカテゴリーに、都市エリートと農民がいかなる反応を示したかを考察することで、パレスチナ人がこれらのカテゴリーにいかに関与・抵抗したかを明らかにし、それによって現在「民族対立」・「宗教対立」として硬直化してしまったパレスチナ問題を紐解く知見を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金城美幸	4. 巻 733
2. 論文標題 「あらゆる抑圧からの解放を！」パレスチナ人の連帯のインティファダ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会機関紙	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyuki Kinjo	4. 巻 -
2. 論文標題 The Possible Renewal of Solidarity with the Palestinians: Through the Eyes of a Korean-Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Conference on the Global Transformation of Christian Zionism Organizing Committee	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 金城美幸	4. 巻 2020年9月号
2. 論文標題 パンデミック下の日本から問う、パレスチナへの責任 = 応答可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 30-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金城美幸	4. 巻 第34号
2. 論文標題 書評：鈴木啓之著『蜂起 インティファダ』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 104-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金城美幸	4. 巻 33
2. 論文標題 書評：イラン・パベ著『パレスチナの民族浄化 イスラエル建国の暴力』・『イスラエルに関する十の神話』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金城美幸	4. 巻 5月号
2. 論文標題 歴史認識論争の同時性を検討するために イスラエルと日本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 162-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金城美幸	4. 巻 32
2. 論文標題 委任統治下パレスチナにおける「民族対立」創出の背景 シオニズム批判の理論的整理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 60-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 Kairos PalestineおよびGlobal Kairos for Justice国際会議に参加して
3. 学会等名 関西パレスチナ研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miyuki Kinjo
2. 発表標題 Displacement, Division, and Demonstration of Return: Overlapping experiences of Palestinian Refugees and Zainichi Koreans.
3. 学会等名 Embracing Solidarities through Sharing Stories of Struggle to Resist Empires (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 アメリカの対イスラエル政策とパレスチナ人の抵抗 私たちは、パレスチナにどう連帯できるか
3. 学会等名 愛知県アジア・アフリカ・ラテンアメリカ 連帯委員会 (愛知県 A A L A) 学習講演会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 パレスチナとの交差を見つけだすために
3. 学会等名 在日本韓国YMCA主催連続ティーチイン「交差するパレスチナ～新たなわたしたちのつながりを求めて～」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 入植者植民地国家イスラエルにおける投獄システム 越境型暴力による強化と拡散
3. 学会等名 越境暴力研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 被占領下のパレスチナ難民にとって「帰還」とは リフター村出身者の事例より
3. 学会等名 日本中東学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 パレスチナ難民が語る村落史からみた「故郷」 破壊されたリフター村出身者の事例より
3. 学会等名 「移動と共生ー移民・難民をめぐるグローバル・スタディーズ」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Miyuki Kinjo
2. 発表標題 Palestinian Popular Identities in Lifta: Oral Histories on a Destroyed Palestinian Village
3. 学会等名 International Conference, Identity's Allies and Labels: History of Identity Categories in Eastern Europe and Palestine/Israel (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金城美幸
2. 発表標題 パレスチナ政治の分断と越境的暴力
3. 学会等名 越境暴力研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松下冽・山根健至・松井信之・井出文紀・金城美幸・長島怜央・金城美幸・福島浩治・中根智子・山口健介・戸田真紀子・福海さやか・知足章宏	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 新自由主義の呪縛と深層暴力 グローバルな市民社会の構想に向けて	

1. 著者名 在日本韓国YMCA（金城美幸）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 204
3. 書名 交差するパレスチナ 新たな連帯のために	

1. 著者名 金城美幸	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 現代地政学時点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Researchmap 金城美幸のページ https://researchmap.jp/Miyuki_Kinjo</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------